

2004年度マクロ経済（上級マクロ経済学後期）

担当者”

- ・ 講師 堀井 亮 horii@econ.osaka-u.ac.jp
- ・ TA 田中仁史（二神ゼミ D1） cg039th@srv.econ.osaka-u.ac.jp
- ・ オフィスアワー 水曜日 午後3時から4時半
4限の授業のある人は午後5時くらいまでに来てくれればおそらくいます。
それ以外の時間帯に来る場合はメールで連絡して下さい。
- ・ 研究室は教務窓口奥の階段を上がってすぐ右手です。（資料室に行く途中）

教科書等について

- ・ 基本的に教科書に沿って授業を進めます。授業時は手元に置いて下さい。
 - Lars Ljungqvist and Thomas J. Sargent, *Recursive Macroeconomic Theory*, Second Edition MIT Press, 2004
- ・ 教科書を入手しておらず、今後も受講するつもりの方は早急に購入してください。Amazon.co.jpでの購入を勧めます。執筆次点では税込み8612円、24時間以内に国内発送されるとのことです。書店（生協含む）での取り寄せは納期が明らかでない限りお勧めしません。金銭的に苦しい人も、最低必要章のコピーを持参してください。
- ・ 一部次の本を使いますが、必要部分はコピーを配布します。しかし、実際に様々な動学モデルを解く方法に興味があるのであれば、購入する価値はあると思います。
 - Thomas Cooley, *Frontiers of Business Cycle Research*, Princeton University Press, 1995
- ・ Stokey and Lucas は前期に十分勉強したはずですので、後期は直接には使いません
- ・ 授業はテキストに沿って進めますが、時間の都合上一部しかフォローできません。授業をペースメーカーにしながら自分自身でもテキストを読み込んでいってください。
- ・ レジュメ類は必要がない限り配りません（完全なレジュメをつくらうと結局テキストを書くことになるので）。
- ・ 説明上必要なことは板書しますので上手にノートを取ってください。

宿題について

- ・ 1～2週に一度宿題を出します。
- ・ 宿題は主にテキストの章末問題を授業の最後に指定します。また、授業中に省略した部分などを宿題として指定することもあります。オリジナルの問題を出すこともあるかもしれません。

- ・ 宿題の提出期限は、特に指定しない限り翌週の授業開始時です。学年、専攻、学籍番号、氏名が明記されていない場合は提出したと見なされません。また、期限に遅れた場合も同様です。
- ・ 返却は翌週の TA によるレビューセッション時に行います。レビューセッションの曜日・時間は今から決めます。これはあくまで追加的サービスとして提供される物なので、必ずしも全員が希望する時間帯に設定できません。レビューセッションに参加できない人は、終了後教務にて返却を受けて下さい。
- ・ 期末試験問題の半分以上は宿題を元に作成する予定です（残りは授業内容から）。従って、宿題を考えて解いて、レビューセッションで理解を確かめること(出席できないのであれば回答例を元に十分復習すること)が、最終的に好成績を得る鍵です。
- ・ 受講生同士で相談することはよいことです。また、場合によっては講師に質問に来ても良いです。ただし、考えず他人の回答を写すことは純粋に労力の無駄です（そんな暇があればテキストを復習した方が期末試験の点が上がるでしょう）。

成績評価

- ・ 期末試験に宿題点を加味します
- ・ スケジュールが一杯なので中間試験は行いません。その代わりに宿題を十分に出します。

この授業の位置づけ

前期は Ramsey モデルと OLG モデル（及び必要なツール）を勉強しました。学部時代に勉強したケインジアンモデルと全く違うので驚いた方が多いと思います。マクロ経済学の歴史的に見ると、ケインズ以前は景気変動の分析には動学モデルが用いられていました。しかし、それらの多くはアドホックな部分均衡モデルであったので、ケインズはむしろ動学的な側面を捨象して、財・貨幣・労働市場の相互依存関係（一般均衡）に注目しました。これは画期的なことだったのですが、その後再び動学モデルを明示的に考える必要性が明らかになってきました。その際、ケインジアンが仮定した市場の不完全性を導入するのは難しいので、まずは完全市場の仮定の下で主体の動学的最適化が考えられました（前期に勉強したモデル）。前期のモデルでは、結局経済は定常状態に収束します。しかし、マクロ経済分析の本来のモチベーションは短期の経済変動、あるいは長期の経済成長がいかにかに決まるかに有ったはずで、後者については 1990 年代に外部性に注目した内生的成長モデルが考案され、現在も活発な分野の一つです（この授業では時間の都合上扱いません。三野先生の経済特講で講義されます）。前者については、1980 年代に完全市場に生産性ショックを導入した Real Business Cycle (RBC)理論が考案されました（この授業の前半のテーマ）。さらに、分析技術が進むに連れ、RBC のモデルに様々な不完全性を導入すること

が可能になってきました(授業の後半で一部を扱います)。その結果現在では、New Classical と New Keynesian といった対立はほぼなくなり、RBC 的な分析ツールは共通知識として広く使われています。その基礎を習得するのがこの授業の目的です。

Reference: Olivier J. Blanchard (2000) "What do we know about Macroeconomics that Fisher and Wicksell did not?" Quarterly Journal of Economics

授業予定

- ・ 第2版のテキストを用いるためシラバスから変更があります。
 - apology: サーチと失業の理論(6章)は省略します。興味のある方は佐々木先生の経済特講を受講することをお勧めします。

第2章 時系列分析 (約1回)

特にマルコフ過程について説明します。

第3 5章 動的計画法の解き方 (DP) (約1回)

前期のマクロ で DP の理論については詳しい授業がなされたので、後期では実際の解き方を中心に説明します。

第8章 完全市場での均衡 (約3回?)

この本の最も基本となる部分です。ミクロ経済学で言うところの交換経済を考えます。ただし、動学モデルであり、endowment が確率的に変動する点にマクロ分析の特徴があります。まず、ミクロでやったように、完全な日付・条件付き財市場での Arrow-Debreu 均衡と Pareto 最適配分の一致を確認します。さらに、Arrow-Debreu 均衡(時点0に全ての取引が終了する)が Sequential Trading の均衡と一致することを確認する。最後に、Sequential Trading の均衡は endowment がマルコフ過程であれば Recursive に表せることを示します(RCEの基礎)。

第12章 再帰的競争均衡(RCE) (約3回?)

ミクロで言うところの生産経済を考えます(Stochastic growth model = Ramsey model + random shock)。この場合も「Pareto 最適 = Arrow-Debreu 均衡 = Sequential Trading の均衡」が成立することを見ます。ショックがマルコフ過程の時、均衡を Recursive に表せます: 再帰的競争均衡(RCE)。RCEでは個人の行動とマクロの動きの consistency が要求されるので、通常のDPでは直接解けません。その方法を Cooley の本の第2章(Hansen and Prescott)を用いて勉強します。

第13章 アセットプライシング (約1回??)

8章のモデルを用いて資産価格(株価等)の動きがどう描写されるかを見ます。重要性の1つは、それが完全市場モデルの妥当性を見るテストになっていることにあります。リスクプレミアムパズル(Mehra-Prescott puzzle)の存在から完全市場モデルの限界が分かります。

第16 - 17章 不完全市場(self-insurance) (約???回)

これまで仮定したような、完全な条件付き財の市場(保険市場)が存在しない場合を考えます。このとき、消費者行動に経路依存性が発生することを確認する。

第19(-20)章 インセンティブの問題 (約???回)

16 - 17章では条件付き財の取引が出来ないことを外生的に仮定した。しかし、実際には原因があるはずである。この章では、コミットメントが出来ない(支払いデフォルト)、あるいは不完全情報(虚偽の報告)が不完全市場の原因になっていることを明示的にモデル化する。また、このインセンティブ問題を recursive に解く方法を勉強する。

... and more? (or less)